

# 半七捕物帳

半鐘の怪

岡本綺堂

青空文庫



## 一

半七老人を久し振りでたずねたのは、十一月はじめの時雨しぐれかかった日であった。老人は四谷の初はつとり酉へ行つたと云つて、かんざしほどの小さい熊手くまでを持って丁度いま帰つて来たところであつた。

「ひと足ちがい失礼するところでした。さあ、どうぞ」

老人はその熊手を神棚にうやうやしく飾つて、それからいつもの六畳の座敷へわたしを通した。酉まぢの市の今昔談が一通り済んで、時節柄だけに火事のはなしが出た。自分の職業に幾らか関係があつたせいであろうが、老人は江戸の火事の話をよく知っていた。放火はもちろん重罪であるが、火事場どろぼうも昔は死罪であつたなどと云つた。そのうちに、老人は笑いながらこんなことを語りだした。

「いや、世の中には案外なことがあるもんでしてね。これは少し差し合ひがありますから、町内の名は申されませんが、やつぱり下町したまちのことで、いつかお話をしたお化け師匠うちの家うちのあんまり遠くないところだと思つてください。そこにしゅったい変なことが出しゅったい来しゅったいしたんで、一

時は大騒ぎをしましたよ」

神田明神の祭りもすんで、もう朝晩は<sup>あわせ</sup>袷でも薄ら寒い日がつづいた。うす暗い焼芋屋の店さきに、八里半と<sup>ふてぶと</sup>筆太にかいた行燈の灯がぼんやりと<sup>とも</sup>点されるようになると、湯屋の白い煙りが今更のように眼について、火事早い江戸に住む人々の魂をおびえさせる秋の風が秩父の方からだんだんに吹きおろして来た。その九月の末から十月の初めにかけて、町内の半鐘がときどき鳴った。

「そら、火事だ」

あわてて駈け出した人々は、どこにも煙りの見えないのに呆れた。そういうことがひと晩のうち一度二度、時によると三、四度もつづいて、一つばんもある。二つばんもある。近火の摺りばんを滅多打ちにじゃんじやんと打ち立てることもある。町内ばかりでなく、その半鐘の音がそれからそれへと警報を伝えて、隣り町でも<sup>ちよう</sup>あわてて半鐘を撞く。火消しはあてもなしに駈けあつまる。それは湯屋の煙りすらも絶えている真夜中のことで、なに見誤ったのかちつとも要領を得ないで引き揚げることもある。しまいには人も馴れてしまつて、誰かが<sup>いたずら</sup>悪戯をするに相違ないと決まつたが、ほかの事とは違うので、そのいたずら者の詮議が嚴重になつた。

仔細もなしに半鐘をつき立てて公方くぼう様の御膝元をさわがす——その罪の重いのは云うまでもない。第一に迷惑したのは、その町内の自身番に詰めている者共であった。

「自身番というのは今の派出所を大きくしたようなものです」と、半七老人は説明してくれた。

「各町内に一個所ずつあつて、屋敷町にあるのは武家持ちで辻番といい、商人町あきんどまちにあるのは町人持ちで自身番というんです。俗に番屋とも云います。むかしは地主が自身に詰めたので自身番と云つたんだそうですが、後にはそれが一つの株になって、自身番の親方とというのがそれを預かつて、ほかに店番の男が二、三人ぐらい詰めていました。大きい自身番には、五、六人も控えているのがありました。その頃の火の見梯子は、自身番の屋根の上に付いていて、火事があると店の男が半鐘を撞くか、または町内の番太郎が撞くことになつていました。それですから半鐘になにかの間違ひがあれば、さしずめ自身番のものが責任を帯びなければならぬのです。今お話し申すのは小さい自身番で、親方が佐兵衛、ほかに手下の定番じょうばんが二人詰めていただけでした」

佐兵衛はもう五十ぐらいの独身者ひとりもので、冬になるといつも疝気に悩んでいる男であった。ほかの二人は伝七と長作と云つて、これも四十を越した独身者であった。この三人は当の

責任者であるだけに、町役人ちやうからも厳しく叱られて、毎晩交代で火の見梯子を見張っていることになった。彼等が夜通し嚴重に見張っているあいだは別になんの変ったこともなかったが、少し油断して横着をきめると、半鐘はあたかもかれらの懶惰うんだを戒めるように、おのずからじゃんじゃん鳴り出した。町役人立合いで検査したが、半鐘にはなんの異状もなかった。その自然に鳴り出すのは夜に限られていた。

不思議を信ずることの多いこの時代の人達にも、まさか半鐘が自然に鳴り出そうとは思えなかった。殊に人が見張っているあいだは決して鳴らないのに因よつても、それが何者かの悪戯いたずらであることは誰にも想像された。おいおいに冬空に近づいて、火というものに対する恐れが強くなつて来たのに付け込んで、何者かが人を嚇すつもりでこんな悪戯をするに相違ないと思つた。しかもそのいたずら者が発見されないので、諸人の心は落ち着かなかつた。たとい人間の悪戯にしても、こんな事が毎晩つづくのは、やがてほんとうの大火を喚び起す前兆ではないかとも危ぶまれた。気の早いものは荷ごしらえをして、いつでも立ち退くことができるように用心しているものもあつた。老人を遠方の親類にあずけるものもあつた。藁一本を炙くべた煙りもこの町内の人々の眼に鋭く沁みて、かれらの尖つた神經は若い蘆の葉のようにふるえ勝ちであつた。もうこうなつては、自身番や番太郎の耄もうろ

碌<sup>く</sup>おやじを頼りにしていることは出来なくなったので、仕事師は勿論、町内の若いものも殆ど総出で、毎晩この火の見梯子を中心にして一町内を警戒することになった。

いたずら者もこの物々しい警戒に恐れたらしく、それから五、六日は半鐘の音を立てなかつた。十月もお会式えしきの頃から寒い雨がびしよびしよ降りつづいた。この頃は半鐘の音がしばらく絶えたのと、雨が毎日降るのちに油断して、町内の警戒もおのずとゆるむと、あたかもそれを待つていたように、不意の禍がひとりの女の頭の上に落ちかかつて来た。

女は町内の路地のなかに住んでいるお北という若い女で、以前は柳橋で芸奴を勤めていたのを、日本橋辺のある大おお店おだなの番頭に引かされて、今ではここに小ぢんまりした妾宅を構えているのであつた。その日は昼間から旦那が来て五ツ頃（午後八時）に帰つたので、お北はそれから近所の銭湯へ行つた。女の長湯をすまして帰つて来たのは五ツ半を廻つた頃で、往來のすくない雨の夜に大抵の店では大戸を半分ぐらい閉めていた。雨には少し風もまじつていた。

路地へはいろいろとすると、お北の傘が俄かに石のように重くなつた。不思議に思つて傘を少し傾けようとすると、その途端に傘がべりべりと裂けた。眼に見えない手がどこからかぬつと現われて、お北の三つ輪の鬘まげをぐいと引つ掴んだので、きやつと云つてよろける

拍子に、彼女は溝板どぶいたを踏みはずして倒れた。その声を聞いて近所の人達が駈け付けたときには、お北はもう正気を失っていた。跳ねあがった溝板で脾腹ひばらを強く突かれたのであった。

家へかつぎ込まれて、介抱を受けて、お北はようよう息をふき返した。当時のことは半分夢中でよくは記憶していなかったが、ともかくも傘が不思議に重くなって、その傘がまた自然に裂けて、何者にか頭を引つ掴まれたことだけは人に話した。町内の騒ぎはまた大きくなった。

「町内には化け物が出る」

こんな噂がひろがって、女子供は日が暮れると表へ出ないようになった。ふだん聞き慣れている上野や浅草の入相いりあいの鐘も、魔の通る合図であるかのように女子供をおびえさせた。その最中にまた一つの事件が起った。

それはお北が眼に見えない妖怪におびやかされてから五日ほど後のことであつた。初冬の長霖ながしけがようやく晴れたので、どこの井戸端でもおかみさん達が洗濯物に忙がしかった。どこの物干にも白い袖や紅い裳すそのかげが、青い冬空の下にひらひらと揺れていた。それも日の暮れる頃には次第に数が減って、印判屋はんこやの物干にかかっている小児こどものあかい着物二枚



だけが、正月のゆうぐれに落ち残った風のようにな袖を寒そうに拵げていた。このおかみさんが夜干よぼしにして置くつもりじゃなかった。その着物が自然にあるき出したのであった。

「あれ、あれ、着物が……」と、往來を通る者が見つけて騒ぎ出したので、近所の人達も表へ駈け出して仰向くと、赤い着物の一枚はさながら魂でも宿ったように物干竿を離れて、ゆう闇の中をふらふらと迷ってゆくのであった。風に吹かれたのではない、隣りの屋根から屋根へと伝わって、足があるように歩いて行くのであった。人々もおどろいて声をあげて騒いだ。ある者は石を拾って投げ付けた。着物の方でもこれに驚かされたらしく、紅い裳すそをひいて飛ぶように走り出したと思ううちに、質屋の高い土蔵のかげに消えてしまった。印刷屋のおかみさんは蒼くなつてふるえた。

これがまた町内を騒がした後に、その着物は質屋の裏庭の高い枝にかかっているのを発見した。そこで論議は二つに分かれた。お北がおびやかされた事件からかんがえると、それは眼にみえない妖怪の仕業であるらしくも思われたが、印刷屋の干物をさらって行った事件から想像すると、それは人間の仕業らしくも思われた。勿論、後の場合にも誰もその正体を見とどけた者はなかったが、何者かがその着物のかげに隠れているのではないかという判断が付かないでもなかった。妖怪か、人間か、この二つの議論は容易に一致しな

つたが、ここに後者の説について有力の証拠があらわれた。町内の鍛冶屋の弟子に権太郎という悪戯いたずら小僧があつて、彼がその日の夕方に質屋の隣りの垣根に攀よじ登つていてころを見付けた者があつた。

「権の野郎に相違ない」

人騒がせの悪戯者は権太郎に決められてしまった。権太郎は今年十四で、町内でも評判のいたずら小僧に相違なかつた。

「こいつ、途方もねえ野郎だ。御近所へ対して申し訳がねえ」

かれは親方や兄弟子に袋叩きにされて、それから自身番へ引き摺って行つてさんざん謝あやまらせられたが、権太郎は素直に白状しなかつた。質屋の隣りの庭へ忍び込もうとしたのは、うまそうな柿の実を盗もうがためであつて、半鐘をついたり干物をさらつたり、そんな悪戯をした覚えはないと強情を張つたが、誰もそれを受け付ける者はなかつた。かれが強情を張れば張るほど、みんなにいよいよ憎まれて、自身番では棒でなぐられた。おまけに両手を縄で縛られて、板の間になつている六畳へほうり込まれてしまった。

これで問題もまず解決したと安心していた町内の人たちは、その夜なかに又もや半鐘の音におどろかされた。半鐘はあたかも権太郎の冤罪を証明するように鮮かな音を立てて響いた。このあいだから撞木は取りはずしてあるのに、誰がどうしたのか半鐘はやはりいつものように鳴った。

もうこうなると人間業ではないらしくなつて来た。一町内の者はまたおびえて、再び総出で火の見梯子を警戒することになったが、その警戒のきびしい間は半鐘もおとなしく黙っていた。警戒が少しゆるむと、半鐘は又すぐに叫び出した。こんな不安な状態が小ひと月もつづいたので、人間の方も疲れて来た。もうこの上はどうしていいか判らなくなった。「お寒くなりました」

「おお、半七さんか。まあこつちへ」

自身番にちように詰めていた家主が笑い顔をつくつて半七を迎えた。それは半七老人が今この話をしている時と同じような、十一月はじめの時雨れかかった日で、店さきの大きい炉には炭火が紅く燃えていた。半七は店へあがつて炉に手をかぎした。

「なんだか騒々しいことがあると云うじやありませんか。御心配ですね」

「おまえさんも大抵お聞き込みだろうが、実に困っているんですよ」と、家主は顔をしかめて云った。「どうぞでしょう。お前さんのお見込みは……」

「そうですね」と、半七も首をかしげていた。「実はわたくしも詳しい話は知らないんですが、その権とかいう悪戯小僧じやないんですね」

「権を縛って置いてても、半鐘はやっぱり鳴るんだから仕方がない。で、権は先ず主人の方へ帰してやりましたよ」

この間からの詳しい事情を家主から聞かされて、半七は眼をつむって考えていた。

「わたくしにもまだ見当が付きませんが、まあ何とか工夫して見ましょう。もつと早く出るとよかつたんですが、ほかに急ぎの御用があつたもんですから、つい遅くなりました。

そこで先ずその半鐘というのを一度見せてお貰い申したいんですが、あがつて見ても宜しゅうございますかえ」

「さあ、さあ、どうぞ」

家主は先に立つて表へ出た。半七は火の見を仰いでちよつと考えていたが、すぐにすると梯子を伝つてのぼつた。彼は半鐘をあらためて又すぐに降りて来て、更に近所を見まわつた。火の見梯子から三軒ほどゆくと、そこには狭い路地があつて、化け物に出逢つ

たという困い者のお北はその路地の中程に住んでいた。路地の奥には可なりに広い空地があつて、片隅に古い稲荷の社やしらが祀られていた。あき地には近所の男の児が独楽こまをまわしていた。路地を出る時にふと見ると、お北の家には貸家の札が貼つてあつた。気の弱い困い者は化け物におどされて三日目に、早々ほかへ引つ越してしまつたと家主が話した。

半七はそれから鍛冶屋の前へ行つた。表からそつと覗いてみると、親方らしい四十ぐらいの男が指図して、三人の職人が熱い鉄かなてこ挺から火花を散らしていた。その傍でぼんやりと鞆ふいしを吹かしている小僧は、この間ひどい目に遭つた権太郎だと家主が教えてくれた。権太郎は四角張つた顔をまつ黒くすぶに煤すすぶらせて、大きな眼ばかりを光らせている様子が、見るからに悪戯いたづらそうな餓鬼がきだと半七は思つた。

「いろいろ有難うございました。まだ少しほかに仕かけている御用がありますから、二、三日中にまた参ります」と、半七は家主に別れて歸つた。

ほかに手放すことのできない用を抱えていたので、二、三日という約束が四、五日に延びて、半七はその町内へ足を向けることが出来なかつた。すると、四、五日のあいだに又いろいろの事件が生み出されて、町内の人たちを驚かした。

まず第一におびやかされたのは、町内の煙草屋のお咲という今年十七の娘であつた。お

咲は本所の親類へ行つて、六ツ半（午後七時）頃に帰つて来ると、冬の日はとうに暮れてしまつて、北風が軽い砂を転がして吹いてゆくのが夜目にも白く見えた。このごろ不思議の多い自分の町内へ近づくにしがつて、若い娘の胸は動悸を打った。もつと早く帰ればよかつたと悔みながら、お咲は俯向いて両袖をしっかりと抱きあわせて、小刻みに足を早めて歩いて来ると、うしろから同じく刻み足に尾<sup>つ</sup>けて来るような軽いひびきが微かにきこえた。お咲は水を浴びたようにぞつとしたが、とても振り返つて見る勇氣はないので、すくみ勝ちの足を急がせて、ようよう自分の町内の角を曲がつたかと思つと、あたかも白い砂が渦をまいてお咲の足もとから胸のあたりまで舞いあがつて来たので、彼女は両袖で思はず顔をおさえたその途端に、うしろから尾けて来たらしい怪しいものは、旋<sup>つむじかぜ</sup>風のように駈け寄つて来てお咲を突き飛ばした。

娘の悲鳴を聞きつけて、近所の者が駈け付けてみると、お咲は氣を失つて倒れていた。彼女の島田の鬚はむごたらしくかきむしられていた。膝がしらを少し摺り剥いただけで、ほかに大した怪我もなかつたが、あまりの驚<sup>おどろき</sup>愕にお咲は蘇生の後もぼんやりしていた。その晩から熱が出て、三日ばかり床に就いた。

妖怪か、人間かという議論がまた起つた。鍛冶屋の権太郎が質屋の隣りの垣根へのぼつ

たのを目撃したのはこのお咲で、それが彼女の口から世間へ洩れたのであるから、自身番でひどい目に逢わされた悪戯小僧は、その復讐のためにお咲のあとを尾けたのではないかという疑いも起つたが、それはすぐに打ち消された。権太郎はその時刻にたしかに自分の店にいたと親方が証明した。ほかにも権太郎が夜なべをしているのを見たという者もあつた。いくら悪戯者でも身体が二つない以上、今度の事件を権太郎になすり付けることは出来なかつた。その不思議もとうとう要領を得ずに終つた。

「夜はもう外へ出るんじゃないよ」

日が暮れると、女や子供はいよいよ表へ出ないことになつた。すると、今度は意外の禍いが男の上にも襲いかかつて来た。第二の打撃をうけたのは自身番の親方佐兵衛であつた。佐兵衛は先ず冬という敵に襲われて、先月の末頃から持病の疝氣に悩まされていたが、なにごんにも此の頃は町内が騒がしくて、毎日のように町役人ちやうの寄合があるので、彼は出来るだけ我慢して起きていた。それがどうしても堪えられなくなつて、昼から温おんじやく石なしどで凌いでいたが、日が暮れると夜の寒さが腹に沁み透つて来た。かれは痙攣さしこみの来る下腹をかかえて炉のそばに唸つていた。

「医者様でも呼んで来ようか」

手下の伝七と長作とが見兼ねて云った。

「まあ、もう少し我慢しようよ」

自身番のおやしや番太郎には金作りが多かった。医者いの薬礼を恐れる彼は、なるべく買い薬で間まにあわせて置きたかつたのであるが、夜のふけるに連れて疼痛いたみはいよいよ強くなつて、彼はもう慾とくにも得とくにも我慢が出来なくなつた。それでも医者いを呼ぶのを嫌つて、こつちから医者いの家へ行こうと云つた。

「それじゃあ私が送つて行こう」

伝七がついて行くことになつた。強い痙攣けいれんで、満足には歩けそうもない佐兵衛を介抱しながら、ともかくも表へ出ると、町には夜の霜が一面に降りていた。伝七は病人の手をひいて、隣り町ちやうの医者いの門をくぐつた。医者いは薬をくれて、あたたかにして寝ていろと注意した。礼を云つて医者いの家を出たのは、もう四ツ（午後十時）に近い頃であつた。

「御町内はこのごろ物騒だというから、途中もよく気をつけてな」と、帰りぎわに医者いが云つた。

その親切な注意が二人の胸にはまた一入ひとしおの寒さを呼び出した。帰り途にも佐兵衛は手を引かれて歩いた。



「木戸の締まらないうちに早く行こう。番太にあげて貰うのも面倒だから」

風もない、月もない、霜の声でもきこえそうな静かな夜であった。町内にももう灯のかげは疎まばらであつた。佐兵衛は下腹をおさえながら屈こみ勝ちにあるいていた。二人は町内にはいつて二、三軒も通り過ぎたかと思うと、質屋の天水桶のかけから何かまつ黒な影があらわれた。それが何であるかを認める間もなしに、その黒い物は地を這うように走つて来て、いきなり佐兵衛の足をすくつた。屈んでいた彼はすぐに滑つて倒れた。ふだんからおびえていた伝七はきやつと云つて逃げ出した。

この臆病者の報告を聴いて、長作は棒を持つてこわごわ出て来た。伝七も得物えものをとつて再び引つ返して来たが、もうその時には黒い物の影も見えなかつた。佐兵衛は転んだはずみに膝を痛めた。まだそのほかに、相手にぶたれたのか、あるいは自分で打つたのか、彼は左の額に石で打つたようなかさすり傷をうけていた。

調べてみると、その晩も権太郎は外出しないという証拠が確かに挙がつた。こうして、悪戯小僧にかかる疑いは漸次しだに薄れて来たが、それと同時にこの不思議に対する疑いはいよいよ濃くなつた。臆病の伝七の云い立てによると、どうも河童かっぱらしいのであつたが、町なかに河童が出る筈はないと云つて誰もそれを信用しなかつた。

「どうも人間らしい」

この頃は方々の家で食い物を盗まれた。ことにお咲をおどかした遺り口といい、佐兵衛を襲った手段といい、妖怪がだんだんに人間味を帯びて来たことは誰にもうなずかれた。権太郎以外のいたずら者がこの町内へ入り込んで来るに相違ないというので、又もや町内総出で毎晩の警戒を嚴重にすることになった。

三

その以来、半鐘はちつとも鳴らなくなった。半鐘はなんにも知らないような顔をして、冬の空に高くかかっていた。

お北の家へはその後に人が越して来た。しかし一と晩で早々に立ち退いてしまった。夜なかに不意に行燈が消えて、そのおかみさんが何者にか頭鬘たぶきをつかんで、蒲団の外へぐいぐい引き摺り出されたというのであった。しかも別に紛失物はなかった。何かこの空家に潜ひそんでいるのではないかと、家主立ち合いで家探しをしたが、その正体は遂に見とどけれなかった。

「やっぱり化け物かしら」

こんな噂がまた起つた。町内の人たちも、化け物か人間か得体えたいの解らないこの禍いを払う方法にはあぐね果てた。空で半鐘が鳴らない代りに、地の上ではやはり不思議の出来事が止まなかつた。

その次に人身御供ひとみごころにあがつたのは、番太郎の女房のお倉であつた。

「番太郎……お若い方は御存じありますまいね」と、半七老人は説明してくれた。「むかしの番太郎というのは、まあ早く云えば町内の雑用を足す人間で、毎日の役目は拍子木を打つて時を知らせてあるくんです。番太郎の家は大抵自身番のとなりにあつて、店では草鞋でも蠟燭でも炭団たじんでも渋団扇しぶうちわでもなんでも売っている。つまり一種の荒物屋ですね。

そのほかに夏は金魚を売る、冬は焼芋を売る。八幡太郎と番太郎の違いだなどと冗談にも云われるくらいで、あんまり幅の利いた商売じゃありませんが、そんな風に何でもするので、なかなか金を溜めている奴が多うござんしたよ」

その番太郎のとなりに小さい筆屋があつて、その女房が暮れ六ツ（午後六時）過ぎに急に産気づいた。夫婦掛け合いの家で、亭主は唯うろうろするばかりであるので、お倉はすぐに取り上げ婆さんと呼びに行つた。そんな使いをたのまれて幾らかの使い賃を貰うのが、

番太郎の女房の役得やくとくであった。お倉は氣丈な女で、殊にまだ宵の口といい、この頃は町内の警戒も嚴重なので、かれは平気で下駄を突っかけて駈け出した。取り上げ婆さんの所は四、五町もはなれているので、お倉はむやみに急いで行つた。今夜も霜陰りという空であつたが、両側の灯はうす明るい影を狭い町に投げていた。すぐに来てくれるように取り上げ婆さんに頼むと、婆さんは承知して一緒に来た。

婆さんはもう六十幾つというので、足がのろかつた。頭巾ずきんに顔をつつんどぼとぼとあるいて来た。お倉はじれつたいのを我慢して、それに付き合つて歩いてみると、婆さんは何か詰まらないことをくどくどと話しかけた。氣の急せいているお倉は上の空うわで返事をしながら、婆さんを引つ張るようにして急いで帰つた。町内の灯はもう目の前に見えた。

隣り町との町境に土蔵が二つ列んでいるところがあつて、それに続いて材木屋の大きい材木置場があつた。前後の灯のかけはここまで届かないので、十間あまりの間には冬の夜の闇くらが漆うるしのように横たわつていた。自分の町内にはいるお倉は、どうしてもこの闇を突つ切つて行かなければならなかつた。この間の晩、煙草屋の娘が災難に逢つたのも此の辺だろうと思ひながら、彼女は婆さんを急せき立てて歩いてくると、積せんである材木のかげから犬のようなものが這い出した。

「おや、なんだろう」

よぼよぼしている婆さんを引つ張つていたので、お倉はすぐに逃げ出すわけにも行かなかったが、気丈な彼女は闇の底をじつと透かしてその正体を見定めようとする間もなく、怪しい物は背をぬすむように身を伏せて来て、いきなりお倉の腰に取り付いた。

「何をしやあがる」

一度は手ひどく突き退けたが、二度目には帯を取られた。ゆるんだ帯がずると解けてゆくので、お倉は少しあわてた。彼女は大きい声で人を呼んだ。婆さんも皺枯れ声をあげて救いを叫んだ。その声を聞き付けて、町内の者が駆けてくる足音に、怪しい物の方でも慌てたらしく、かれはお倉の右の頬を引つ搔いて逃げた。お倉は二、三間追つ掛けて行つたが、足の早い彼はどこへか姿を隠してしまった。

「化け物なんて嘘です。たしかに人間ですよ。暗くつて判りませんでしたけれど、何でも十六七ぐらいの男でした」と、お倉は云つた。気丈な彼女の証言によつて、化け物の正体はいよいよ人間ときめられたが、さてそれが何者であるかは判らなかつた。

併し人間ときまれば又それを取り押える方法もあると、町役人どもは自身番に集まつて、その悪戯者を狩り出す相談をしていると、ここへ又新しい不思議な報告が来た。それはお

倉が曲者に出会つてから半時ほどの後であつた。さきに干物を攫さらわれた印判屋の台所の上で、なにかごとごとという音がきこえたので、おおかた猫か鼠だろうと思つた女房は、台所へ出てしつしつと追つたが、屋根のうえの物音はまだ止まなかつた。このあいだの一件に驚かされている彼女はぞつとしたが、それも怖い物見たさの好奇心から、引窓の引き綱を解いてそろそろと明けた。その途端になにを見たか、彼女はきやつと云つて奥へころげ込んだ。

彼女がふるえながら話すところに因ると、かれが屋根の上をそつと覗こうとする時に、引窓の穴から二つの大きい光つた眼が出た。彼女はそれ以上を見とどける勇氣も無しに奥へ逃げ込んでしまつたのであつた。

この報告を受け取つて、人々はまた迷つた。

「番太郎の女房の云うことはあてにならない。どうも人間ではないようだ」と、今夜の評議も結局不得要領に終つた。

こうして不安と混雑とを続けているうちに、半七は一方の用が片付いた。きょうはいよいよ半鐘の詮議に取りかかろうと思つていたが、午前ひるまえ前は客が来たので出る事ができなかつた。彼は八ツ（午後二時）頃に神田の家を出て、呪いの半鐘に見おろされている薄暗い

町へ踏み込んだ。

「気のせいか、陰気な町だな」と、半七は思った。

風はないが、底寒い日であった。薄い日の光りがどんよりと洩れたかと思うと、又すぐに吹き消すように消えてしまった。昼でもあまり暗いので、鴉も途惑いとまじをしたらしい、ねぐらを急ぐように啼き連れて通った。半七はふところ手をして、まず町内の鍛冶屋のまえに立つと、その店からは大小の蜜柑がばらばら飛び出すのを、小児こどもたちが群がって拾っていた。きようは十一月八日のふいごまつ 鞆ふいごまつ 祭りであることを半七はすぐに覚った。小児の群れのうしろから覗いて見ると、親方は蜜柑を往来へ威勢よく撒まいていた。職人も権太郎けんじろうも箆しるに入れた蜜柑を忙がしそうに店へ運んでいた。

半七は自身番へ寄つて、家主を相手に世間話をしながら、鍛冶屋の蜜柑撒きの済むのを待っていた。半鐘一件の片付かない間は、家主はかならず交代で自身番へ詰めていることになったので、早く埒が明いてくれなければ困るなどと、家主は手前勝手な愚痴を云つていた。

「御心配にやあ及びません。近いうちに何とか眼鼻をつけてお目にかけます」と、半七は慰めるように云つた。

「どうか宜しく願います。だんだん寒空には向つて来ますし、火事早い江戸で半鐘騒ぎは気が気でありませんよ」と、家主はいかにも弱り抜いているらしかった。

「お察し申します。なに、もうちつとの御辛抱ですよ。あの鍛冶屋の韃祭りたまりが済んだらば、小僧をちよいと此処へ呼んで下さいませんか」

「やっぱりあの小僧がおかしゆうございますか」

「と云う訳でもありませんが、少し訊きたいことがありますから、あんまり嚇おどかさないうそつと連れて来てください」

往来へころがる蜜柑の数もだんだん減つて、子供たちの影も鍛冶屋の店さきを散つてしまふと、家主は権太郎を呼びに行つた。半七は煙草をのみながら表を眺めていると、壁色の空はしだいに厚くなつて来て、魔のような黒い雲がこの町の上を忙がしそうに通つた。海鼠なまこ売りの声が寒そうにきこえた。

「これは神田の半七親分だ。おとなしく御挨拶をしろ」と、家主は権太郎を引つ張つて来て半七のまえに坐らせた。きようは韃祭りのせいふたごか、権太郎はいつものまつ黒な仕事着を小ぎつぱりした双子ふたごに着かえて、顔もあまりくすぶらしていなかつた。

「おめえが権太郎というのか。親方は今なにをしている」と、半七は訊いた。



「これからお祝いの酒が始まるんだ」

「それじゃあ差当りお前に用もあるめえ。きようは蜜柑まきで、お前も蜜柑を貰ったか」

「十個とおばかり貰った」と、権太郎は袂を重そうにぶらぶら振ってみせた。

「そうか。なにしろ、ここじや話ができねえ。裏の空地あきちまで来てくれ」

表へ出ると、霰あられがばらばら降って来た。

「あ、降って来た」と、半七は暗い空を見た。「まあ、大したこともあるめえ。さあ、すぐに来てい」

#### 四

権太郎はおとなしく付いて来た。半七は路地へは行って、稲荷の社のまえの空地に立った。

「おい、権太。お前はまったくあの半鐘を撞いたことはねえか」

「おいら知らねえ」と、権太郎は平気で答えた。

「印判屋はんこやの干物に悪戯をした覚えもねえか」

権太郎はおなじく頭かぶりをふった。

「この裏にいた妾を嚇かしたことがあるか」

権太郎はやはり知らないと言った。

「お前には兄弟か、仲のよい友達があるか」

「別に仲の好いというほどの友達はねえが、兄貴はある」

「兄貴は幾つだ。どこにいる」

霰がざつと降つて来たので、半七も堪まらなくなつた。かれは権太郎の手を引つ張つて、以前お北が住んでいたという空家の軒下に来た。表の戸には錠かぎが卸おろしてなかつたので、引くとすぐにさらりと明いた。半七は沓くつぬぎ脱へはいつて、揚げ板になつてゐる踏み段を手拭で拭きながら腰をかけた。

「お前もここへ掛けるよ。そこで、おめえの兄貴というのは家うちにいるのか」

「年は十七で、下駄屋に奉公してゐるんだ」

その下駄屋はここから五、六町先にあると、権太郎は説明した。おやじが死ぬと間もなく、阿母おふくろはどこへか行つてしまつて、兄貴と自分とは孤みなしご児同様に取り残されたのであると云つた時には、いたずら小僧の声も少し沈んできこえた。半七もなんとなく哀れを誘

われた。

「じゃあ兄弟二人ぎりか。兄貴はおめえを可愛がつてくれるか」

「むむ。宿下がりの時にやあ何日いっでもお闇魔えんまさまへ一緒に行つて、兄貴がいろんなものを食わしてくれる」と、権太郎は誇るように云つた。

「そりゃあ好い兄貴だな。おめえは仕合わせだ」と、云いかけて半七は調子をかえた。彼は嚇すように権太郎の顔をじつと視た。

「その兄貴をおれが今、ふん縛つたらどうする」

権太郎は泣き出した。

「おじさん、堪忍しておくれよう」

「悪いことをすりやあ縛られるのはあたりめえだ」

「おいらは悪いことをしねえでも縛られた。それであんまり口惜くやしいから」

「口惜しいからどうした。ええ、隠すな。正直にいえ。おらあ十手を持っているんだぞ。

てめえは口惜しまぎれに、兄貴になんか頼んだらう。さあ、白状しろ」

「頼みやあしねえけれども、兄貴もあんまりひどいって口惜しがって……。なんにもしねえものを無暗にそんな目にあわせる法はねえと云つた」

「そりやあ手前のふだんの行状が悪いからだ。現にてめえは柿を盗もうとしたじゃねえか」と、半七は叱った。

「そのくらは子供だから仕方がねえ。叱つて置いても済むことだ。それも親方に撲なぐられるのは我慢するけれども、自身番の奴らがむやみに棒で撲つたり、縛つたりしやあがつた。ひとを縛るということは重いことで、無暗に出来るもんじゃあねえと兄貴が云つた」と、権太郎は泣き声をふるわせた。「おいらはもうこうなりやあ何もかも云つちまうが、兄貴があんまり口惜しいというんで、おいらの加勢で意趣返しをしてくれたんだ。おいらが垣根を登つたなんて密告つげぐちをした奴は煙草屋のおちやつびいだ。おいらをぶん撲つて縛つた奴は自身番の耄碌おやじだ。こいつ等をみんなひどい目にあわしてやると、兄貴は終しよつち始ゆづ狙つていたんだ」

「すると、煙草屋のむすめと自身番の佐兵衛と番太の鼻かかあと、この三人にいたずらをした奴は手前の兄貴だな」

「おじさん、堪忍しておくれよう」

権太郎は声をあげて又泣き出した。

「兄貴が悪いんじゃあねえ。兄貴はおいらの加勢をしてくれたんだ。兄貴を縛るならおい

らを縛つてくんねえ。兄貴は今までおいらを可愛がつてくれたんだから、おいらが兄貴の代りに縛られても構わねえ。よう、おじさん。兄貴を堪忍してやって、おいらを縛つてくんねえよ」

彼は小さいからだを半七にすり付けて、泣いてすがった。

すがられた半七もほろりとした。町内で札付きのいたずら小僧も、その小さい心の底にはこうした美しい、いじらしい人情がひそんでいるのであつた。

「よし、よし、そんなら兄貴は堪忍してやる」と、半七は優しく云つた。「今の話はおれ一人が聴いただけにして置いて、だれにも云わねえ。その代りに俺の云うことを何でも肯きくか」

相手の返事は聞くまでもなかつた。権太郎は無論なんでも肯くと誓うように云つた。半七は彼の耳に口をよせて何事かをささやくと、権太郎はうなずいてすぐに出て行つた。

霰は又ひとしきり降つて止んだが、雲はいよいよ低くなつて、一種の寒い影が地面へ掩おほいかぶさつて来た。昼でもどこの家も静まりかえつていた。掃溜はきだめをあさりに来る犬もきようは姿を見せなかつた。空家を忍んで出た権太郎は、ぬき足をして稲荷の社のまえに行つて、袂から鞆祭りの蜜柑を五つ六つ出した。彼は木連きつれ格子のあいだからそれをそつと転

がし込んで、自分は土のうえに平蜘蛛ひらぐものように俯伏していた。彼は一生懸命に息を殺していた。

半七は空家に腰をかけてしばらく待っていたが、権太郎からは何の報告もないので、彼は待ちあぐんでそつと出て行った。

「おい、権太、なんにも当りはねえか」と、半七は小声で訊くと、権太郎は俯伏していた首をあげて、それを左右に振った。半七は失望した。

霰はまた音をたてて降って来たので、半七はあわてて手拭をかぶって、あられに打たれておとなしく俯伏している権太郎を見るに忍びないので、彼はこっちへ来いと頤あごで招くと、権太郎はそつと這い起きて戻って来た。

「稲荷さまのなかでなんにも音がしねえか。がたりともいわねえか」と、半七はまた訊いた。

「むむ、がたりともござりともいわねえよ。どうもなんにも居ねえらしい」と、権太郎は失望したようにささやいた。二人は元の空家へはいった。

「お前まだ蜜柑を持っているか」

権太郎は袂から三つばかりの蜜柑を出した。半七はそれを受け取って、自分のうしろの

障子を音のしないようにするりとあげた。入口は二畳で、その傍そばに三畳ぐらいの女中部屋が続いているらしかった。半七はその二畳に這い上がって、つき当りの襖をあげると、そこには造作の小綺麗な横六畳があつて、縁側にむかつた障子ばかりが骨も紙もひどく傷いたんでいるのが、薄暗いなかにも眼についた。骨はどこぞ折れていて、紙も引きめくつたように裂けていた。半七はその六畳のまん中へ蜜柑を二つばかり転がし込んだ。それから女中部屋の襖をあげて、そこへも一つ投げ込んだ。入口の障子を元のように閉め切つて彼は再び沓くつぬぎ脱へ降りた。

「静かにしているよ」と、彼は権太郎に注意した。

二人は息をのみ込んで控えていると、外のあられの音はまた止んだ。内では何の物音もきこえないので、権太郎は少し待ちくたびれて来たらしかった。

「ここにも居ねえのかしら」

「静かにしろと云うのに……」

この途端に、奥の方でがさりという微かなひびきが聞えたので、二人は顔を見あわせた。何者かが障子の破れをくぐつて、六畳の間へ這い込んで来るらしく思われた。それは猫のような足音で、畳にざらざらと触れる爪の音がだんだんに近づいて来た。じつと耳をすま

して聴いていると、その者は半七の投げこんだ蜜柑をむしゃむしゃ食っているらしかった。「畜生め」

半七は笑いながら権太郎に眼くぼせして、二人は草履を手に持って一度に障子をあげた。つづいて次の襖を蹴ひらいて、六畳の座敷へばらばら跳り込むと、うす暗いなかには一匹の獣がひそんでいた。獣は奇怪な叫び声をあげながら、障子を破って縁側へ逃げ出そうとしたところを、半七はうしろから追いついてその頭を草履でなぐった。権太郎もつづいて撲り付けた。獣は度を失ったらしく、白い牙をむき出して権太郎に飛びかかって来た。こういう場合には平生のいたずらが役に立って、彼は物ともしないでその奇怪な獣と取組んだ。怪物はおそろしい声をあげて唸った。

「権太、しつかりしろ」

声をかけて励ましながら、半七は頭にかぶっていた手拭を取って、うしろからその敵の喉に巻きつけた。喉をしめられて怪物もさすがに弱ったらしく、いたずらに手足をもがきながら権太郎にとうとう組み敷かれてしまった。気の利いている権太郎は自分の帯を解いて、すぐに彼をぐるぐる巻きに縛りあげた。そのあいだに半七は縁側の雨戸をこじあけると、陰った日の薄い光りが空家のなかへ流れ込んだ。



「畜生、案の通りだ」

権太郎に生捕られた怪物は大きな猿であつた。この怪物と格闘した形見かたみとして、彼は頬や手足に二、三カ所の爪のあとを残された。

「なに、この位、痛かあねえ」と、彼は得意らしく自分の獲物をながめていた。猿は死にもしないで、おそろしい眼を瞋いからせていた。

「これが宮本無三四むさしか何かだと、狒々退治ひひとか云つて芝居や講釈に名高くなるんですがね」と、半七老人は笑つた。「それから自身番へ引き摺ひつて行くと、みんなもびっくりして町内総出で見物に來ましたよ。なぜわたしが猿公えんこうと見当をつけたかと云うんですか。それは半鐘をあらために登つた時に、火の見梯子に獸の爪の跡がたくさん残つていたからですよ。どうも猫でもないらしい。こいつは猿公が悪戯いたずらをするんじゃないかと、ふいと思ひ付いたんです。困い者の傘の上に飛び付いたり、物干のあかい着物を攫さらつて行つたり、どうしても猿公の仕業しわざらしゆうござんすからね。そこで、その猿公がどこに隠れているのか、わたくしは稲荷やしろの社やしろだろうと見当を付けたんですが、それはちつとはずれました。けれども多分最初のうちは社の奥にかくれていて、お供物くもつなんぞを盗み食いしていたのが、だん

だん増長していろいろの悪戯を始め出して、そのうちに囲い者の家があいたもんだから、その空店あきだなの方へ巢替えをして、またまた悪さをしたんだらうと思います。可哀そうなのは権太郎で、ふだんの悪戯が祟りをなして飛んだひどい目に逢いましたが、兄貴のことは私のほかに誰も知りません。なにもかもみんな猿公の悪戯ということになってしまいました。権太郎もその化け物を退治してから、町内の人達にも可愛がられるようになりましてね。とうとう一人前の職人になりましたよ」

「一体その猿はどこから来たんです」と、わたしは訊いた。

「それが可笑おかしいんです。その猿公はね、両国の猿芝居の役者なんです。それがどうしてか逃げ出して、どこの屋根を伝ったか縁の下をくぐったか、この町内へまぐれ込んで来て、とうとうこんな騒さわぎを仕出来しでかしたんですが、だんだん調べてみると、こいつは女おんながた形で八百屋お七を出し物にしていたんです。ね、面白いじゃありませんか、ふだんから火の見櫓にあがって、打てば打たるる櫓の太鼓、か何かやっていたもんだから、同じいたずらをするにしても、火の見梯子へ駈けあがって、半鐘をじゃんじゃん打ぶつ付けたと見えるんですね。猿公に芝居がかりで悪戯をされちゃあ堪まりませんや。はははははは。わたくしも長年の間、いろいろの捕物をしましたがね、猿公にお繩をかけたのは飛んだお笑いぐさで

すよ」

「その猿はどうしました」と、わたしは好奇心にそそられて又訊いた。

「その飼主は一貫文の科料、猿公は世間をさわがしたという罪で遠島、永代橋から遠島船に乗せられて八丈島へ送られました。奴は芝居小屋なんぞで窮屈な思いをしているよりも、島へ行つて野放しにされた方が仕合わせだったかも知れません。畜生のことでもありますもの、島の役人だつて嚴重に縛つて置いたりするもんですか、どこへかおつ放してしまいますよ」

猿の遠島——こんな珍しい話を聴かされて、わたしは今日もわざわざたずねて来た甲斐があつたと思つた。



# 青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」 光文社文庫、光文社

1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

入力：tat\_suki

校正：菅野朋子

1999年6月1日公開

2012年6月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 半七捕物帳

## 半鐘の怪

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>